

薬物汚染から学生を守るために

曾田 成則

(東海大学教育学部学生生活支援室 室長)

二〇〇八年は大学関係者にとって大麻汚染の恐怖に戦々恐々の年だったのでないでしょうか。次々と明るみに出たキャンパスにおける大麻事件は、薬物が、学生でも実に簡単に入手できる時代になったことを改めて認識させられました。しかも法の盲点を突きながら、ネットを通じて海外から種子を輸入するといった、従来とは異なった流通経路が拡大していることも驚きでした。

警視庁の調べでは、二〇〇八年一〇月末現在の大麻による検挙者数は二一五〇人。過去最悪といわれた二〇〇七年度が三二八二人、それを上回る勢いです。その背景には、ネットを通じて簡単に種子が輸入できるなど、ネット社会

の弊害が指摘されています。さらに、大学の国際化によって、留学生や留学経験者などを通じて大麻がキャンパスに流通するようになったなどの見方もあるようです。しかし、一連の事件の根っこには、「大麻はタバコより害が少ない」「大麻は合法化されている国もある」といった誤った認識や、そうした大麻擁護論や社会風潮を抛りどころにして、大麻を安易に容認している学生の意識の低さにあります。キャンパス大麻事件で検挙された学生の中には懲役六カ月、執行猶予三年の判決があり、退学処分になっている者もいます。大麻くらいなら、などと高をくくっているとしたら、この事実をどう受け止めるのでしょうか。安易な気持ちで

大麻に手を出せば、懲役刑の犯罪者に転落するばかりでなく、取り返しのつかない汚点を人生に残すことを想像してほしいと学生諸君には強く訴えたいと思います。

法律の整備はもちろん必要ですが、大麻をはじめとした薬物の害を、若者たちにしっかりと認識させることが必要であり、大学としてできることは、直ちに始めるべきでしょう。同時に、薬物のようなものに依存しない生活態度を育てていくこと、薬物に対する教育を初等教育の段階から徹底することが大切だと思われれます。

●薬物撲滅への東海大学の取り組み

東海大学では、二〇〇一年、全国の大学に先駆けて教養部に学生のキャンパスライフをサポートする総合相談窓口として学生生活支援室を開設。二〇〇二年度から本格的な活動を開始し、特に悪徳商法に対する注意呼びかけなど、学生へのさまざまな啓蒙活動の一環として、薬物や大麻の乱用防止についても積極的にキャンペーン活動を展開してきました。学内では、学生の健康管理をあく「東海大学健康推進センター」（当時保健管理センター）と連携、また、学外では地元の秦野警察署と連絡を取り合いながら、

ドラッグの撲滅を呼びかけてきました。

幸いにも、これまで不祥事には至っていませんが、昨今のキャンパスにおける大麻汚染の状況をみれば、その危険性と無縁な大学などありえません。それだけに、さまざまな機会を通じて、きめ細かい対応が必要と考えています。学生生活支援室での、これまでの主な取り組みを紹介しておきます。

1. 学生への啓蒙活動

① 教養部学生生活支援室が編集・発行する在学生向け学生生活支援情報誌での啓蒙

・小冊子「CLIC NAVI」（A5判八頁／年二回発行）でドラッグ特集

「無関心ではいられない！ あなたにも迫るドラッグの恐怖」（二〇〇四年二月）

・学生生活支援室「相談対応事例集」（A5判・二二〇頁／毎年度一回発行）で、合法ドラッグおよびドラッグに関する相談事例を掲載（二〇〇五年四月より毎年）
 ・学生生活支援情報誌「BABニュース」（A4判・八頁／一六頁／年六回発行）でドラッグ特集

「NO DRUGS！ 手を出す前に読め！」（二〇〇五年一〇月）

「身近に迫る大麻の恐怖 好奇心でも犯罪です」（二〇〇八年二月）

② 教養部での学内啓蒙活動

・新入生オリエンテーションでの呼びかけと注意・冊子配布（毎年度五月）

・大麻防止ポスターの掲示（A2判ポスター／二〇〇八年二月）

③ 教養部学生生活支援室と東海大学健康推進センターが連携した「クイック講座」で薬物の恐ろしさを在学生に啓蒙（二〇〇五年七月より毎年度）

「魔薬になる麻薬 あなたに迫るドラッグの恐怖」（保健師による講演）

2. 保護者への啓蒙活動

① 教養部学生生活支援室と校友課（後援会）が連携した保護者への啓蒙活動

・新入生保護者を対象とした「東海大学近況報告会」を全国二八地区（二〇〇八年度）で開催。その折に学生生活の注意点として、保護者にも薬物への意識を高めもらう

・新入生保護者に、学生生活支援室「相談対応事例集」を配布

② 保護者向けの校友会誌「東海」での啓蒙

このように、二〇〇四年頃から、薬物やドラッグ防止について重点的に啓蒙活動を展開してきました。それは、合法ドラッグといわれていたマジックマッシュルーム、「エクスタシー」などの俗称で知られる化学合成薬物MDMAの急速な乱用拡大が背景にありました。

マジックマッシュルームは、アルカロイド系のシロシンなどの成分を含む幻覚性キノコで、麻薬取締法の規制外であったため「合法ドラッグ」などと呼ばれ、都心の街頭などで大手を振って販売されていました。しかし、幻覚状態での事故などが多発したことから二〇〇二年に「麻薬及び向精神薬取締法」の麻薬原料植物に指定され、所持・譲渡・譲受すれば七年以下の懲役刑などで罰せられるようになったのです。

しかし、その後も「合法ドラッグ」といわれるものは後を絶たず、さらにお菓子やサプリメントのように色がカラフルで、「痩せられる」など女性のダイエット志向などにつけこんで一気に広がったのがMDMAです。MDMAの押収量は、二〇〇二年の一七万四二四八錠から、翌二〇〇三年には三九万三〇六二錠に増加したほど。学生や若者が出入りする渋谷、新宿といった都心の繁華街はもとより、横

浜、町田といった周辺都市にも広がり、しかも街頭やいわゆるクラブ、さらにはネットなどで手軽に手に入るまでに拡大していました。MDMAの恐さは、覚せい剤と似た化学構造をもつことから、中毒や依存性が高く、大量に摂取すれば死亡もあることです。こうした薬物による汚染をキャンパスに持ち込まないためにも啓蒙活動が不可欠でした。

●昼休みを利用した「クイック講座」や保護者への啓蒙

学生に対しては、冊子やチラシの配布、学内広報誌等での啓蒙を中心に展開しましたが、関心を持つきっかけになってくれればと、お昼休みの三〇分を利用して、健康推進センターの保健師に講師になってもらい学生生活支援室で「クイック講座」も開催しました。これは、学生たちのドラッグへの関心を喚起したという意味で効果的だったようです。この時期には、学生生活支援室の相談でも、「合法ドラッグって何が合法なですか」とか「脱法ドラッグって何ですか」など、素朴な疑問をぶつけてくる学生もありました。さらに、東海大学ならではの取り組みとしては、校友課と連携した保護者に対する啓蒙活動が挙げられます。東海大学では、学生の保護者による後援会という組織が

各県、海外も含め五一地区に組織されています。在学生の保護者の皆さんが自主的にボランティアで活動しているもので、大学の教育・研究への支援、各種スポーツなどの応援、保護者同士の親睦などの活動を展開しています。

これは、大学の教育は、大学だけではなく、大学と学生と家庭が三位一体となって初めて成果をあげることができるといふ、創立者・松前重義博士の思想に共鳴した保護者の皆さんが、各地で自主的に活動を始め、すでに半世紀近い活動の歴史をもつものです。各地区の後援会では毎年九月に総会を開催し、決算・予算も含め活動のまとめを行います。その折に、大学からは教職員が各地を訪問し、来場した保護者一人ひとりと面談し、子女の成績状況の相談や就職、学生生活相談などに応じています。この機会にも大学からは、特に注意を喚起すべき問題については、保護者の皆さんに呼びかけています。

また、後援会の新入生の保護者の皆さんには、五、六、七月の土日を中心に学生生活支援室と校友課の職員が要望のあった地区を訪問し、大学の「近況報告会」を開催。この場では、学生生活支援室のスタッフが講演し、薬物に対する保護者の意識を高める呼びかけも行っていきます。保護者の皆さんと接して感じるのは、「自分の子どもに

限って」とか「自分の子どもとは縁のない話」として、ドラッグの話題を遠いことのように認識していることです。私たちの警告に、誰もが、そういう薬物の危険にさらされている時代であることを再認識し、改めて驚かれる方は少なくありません。「親元を離れている息子に早速メールして注意をよびかけました」という反応の早いお母さんもいたほどで、大切なのは、保護者の皆さんと危機感を共有することなのです。

●大麻は脳の中枢に悪影響をおよぼす

こうした取り組みが奏功しているのか、二〇〇八年に起きた大学キャンパスに広がる大麻汚染においても、検挙者を出すといたった不祥事に至っていないことに、ほっと胸をなでおろす日々ではあります。広報関係や学生生活関係の大学教職員の皆さんと顔を合わせると、「オタクは大丈夫？」などという会話が挨拶代わりになっているようでは情けない限りですが、学生生活を支援する立場にあるものとしては、さまざまな機会を通じて大麻の危険性を呼びかけていくほかはありません。特に新入生のオリエンテーションでは、しっかりと大麻の害を認識させるべきでしょう。

残念なのは、相変わらず「大麻擁護論」がネットなどを通じてまかり通っていることです。「大麻はタバコより害が少ない」「医薬用に使われている」「海外では合法の国もある」などなど。さらには、「マリファナが偉大なロックミュージックを生み出した」「大麻を吸うのはカッコイイ」など、大麻を文化やファッションと関連付けて擁護する意見もあります。

私は団塊の世代の一人ですが、青春時代に享受した六〇年代末から七〇年代の音楽や芸術は、ロックやジャズ、ヒップホップメントから反戦平和運動に至るまで、ほとんどがマリファナやドラッグと無縁ではありませんでした。しかし、その後そうしたミュージシャンやアーティストはどうなったか。非業の死をとげたもの、ドラッグ中毒を克服するため、全てを失ったものなど枚挙にいとまがありません。こうした事例を語ることができるのもわれわれ世代の特権です。団塊オヤジからのメッセージとして声を大に言いたいものです。「ドラッグはカッコよくない」「ドラッグにおぼれる人生はみじめである」と。

最後に、東海大学教育学部学生生活支援室が発行している学生生活支援情報誌「BABニュース」に掲載した記事を抜粋させていただきます。それは、東海大学健康推進セン

ター所長（医学博士・理学博士）の灰田宗孝先生に大麻の害について、インタビューした記事です。灰田先生は「大麻は脳の中枢前頭前野に悪影響をおよぼす」と大麻乱用に警鐘を鳴らされています。

「大麻の主成分であるTHC（テトラヒドロカンナビノール）は、脳の前頭葉の中の前頭前野という部分に影響します。前頭前野は、額の裏側あたりにある脳の

中枢的な役割をしている部分で、物事を考えたり、やってはいけないことを判断する働きをし、挑戦する気持ちや、やる気などもここから出ています。つまり、人間が人間らしい生活をするのに最も重要な部分です。この働きが鈍ると、危険だと分かっても、大麻から手を引くという道徳的な判断ができず、やがて、身体を破壊する危険な薬物にも平気で手を出すようになります。やる気がなくなれば、思考力の低下につながり、成績にも影響が出てきます。

また、THCは、一度吸引すると三〜四週間体内に残留するという特徴があり、その間、

徐々に減少しながら精神に刺激を与え続けますが、それがなくなると、うつ状態を引き起こします。その結果として、再び大麻に手を出し、常に刺激物が体内にないと生活できないようになり、精神的な依存を引き起こすのです。つまり大麻は、軽率に手を出せば人間性を破壊する危険な薬物といえます」『BABニュース七六号／特集…「身近にせまらる大麻の恐怖」より』（二〇〇八年二月八日発行）

December 2008
No.76

BAB

NEWS

babニュース SUPPORT & NAVIGATION
●発行所 東海大学数学部学生生活支援室(CLIC)

特集
身近にせまる
大麻の恐怖

「好奇心でも犯罪です」

ミニ特集：「ハンディキャップと個性」— P5
 ・ネオンバス・インナーメーション P6~12
 ・めざエコNEWS P12
 ・C.A.P「東海大学クリスマスU-night」! — P13

「就職活動準備講座」合宿も開催! P14
 ・バドミントンでクリスマスフェア開催! P15
 ・湘南校舎にカフェテラス(仮)が選にOPEN! P15

TOKAI UNIVERSITY

BABニュース76号（2008年12月8日発行）